

# 垂乳根と子宮と同胞

近 藤 健 二\*

## はじめに

語義不詳と言われる枕詞の一つに、「垂乳根の (taratinenö)」がある。これは「母」にかかる枕詞として、『万葉集』の本文では「垂乳根乃」あるいは「足乳根之」のように訓字と万葉仮名を混ぜて記されたり、「多良知祢乃」のように万葉仮名だけを使って記されたりしているが、読み下し文では次のように平仮名書きされるのが通例である。

たちねの母が手放れかくばかりすべなき事はいまだ<sup>せ</sup>為なくに (『万葉集』2368)

語義不詳と言われる他の枕詞の場合と同様に、「垂乳根」にもいくつかの語源説がある。その中で、「垂 (tara)」は「垂らす (tarasu)」という動詞の語幹で、「乳 (ti)」は「乳」のこと、「根 (ne)」は「女」を意味するというのが昔からある代表的な説である。これに対して、「足乳根」という表記に注目した説、すなわち「垂」は「足る」を意味したという説がある。たとえば、中西進 (2008) は「垂乳」を「充足した乳」、「根」を「接尾語」とであると解釈している。

これらはいずれも自然な解釈であるように思われる。「垂れた乳」という意味、あるいは「充足した乳」という意味が、万葉歌を今見るような形に書きとめた人の意識にあったことは確かであろう。そのような意識があればこそ、「垂」や「足」という字をあてたにちがいない。しかし、現存する写本は平安時代後期を溯らないと言われており、原本を転写する過程で、あるいは転写を重ねる過程で原本の表記が書き換えられた可能性を否定できない。歌集を編纂する際に書き改められた可能性さえもあろう。というよりも現在では、犬飼隆 (2008) が主張するように、もっぱら万葉仮名を用いた一音一字式の表記法が韻文の本来の表記法であったという考えが近年の木簡研究を通じて一つの事実として認定されるまでに至っている。したがって、訓字としての「垂」や「足」のみに頼ってその原義を突きとめようとするのは、方法として万全であるとは言えない。

「垂れた乳」とか「充足した乳」という意味は、筆者の考えでは、「垂乳根」の原義が忘却された後に生まれたもの、いわば歪曲された意味である。ここで予断的に述べてしまえば、「垂乳根」の原義は「子宮」あるいは「腹」のことであり、「垂乳根の母」とは「子袋のある

\*人文学部教授一言語学

母」のことであった。そして、「子宮・腹」を表す語から親族名詞を中心とする一連の語が派生した。

このことを事実として明らかにするには、「垂乳根」以外のさまざまな言葉を議論の俎上に載せなければならない。そして、「久方の (φisakatanō)」や「足引の (asiφikīnō/asiφikinō)」などの語について論述した拙論 (2009) におけるのと同様に、アジアのみならずヨーロッパの言語をも視野におさめたいうで、遙かな過去にまで足を踏み入れなければならない。本稿は、現生人類の起源と同様に言語の起源も一つであるという想定のもと、アジアの諸言語とヨーロッパの諸言語が同一であったことの痕跡を見いだそうとする企ても含んでいる。

## 1. 周縁と空洞

考察の出発点となるのは、「端 (φata)」や「縁 (φuti)」など、物や場所の周縁部分を表す語である。これらの語の祖形は、その語頭音の [φ] が [p] に溯ると考えられるので、\*pata ないしはこれに類する形であったと推定される。そして、それが \*pata であったとして、\*pa- の原義は「端」であり、\*-ta の原義は「場所」であったと推定される。

\*pata の同義語あるいは類義語として、\*pala/para と \*pana と \*paka が存在したことにもふれておかねばならない。これらの語における \*pa- は \*pata の \*pa と同種のものであり、\*-la/-ra と \*-na と \*-ka は \*-ta と同様に「場所」を意味したと想定される。そして、たとえば、「縁 (φeri)」や「辺ろ (φero)」は \*pala/para 系列の語であり、「端 (φana)」や「鄙 (φina)」は \*pana 系列の語であると見なされる。なお、これらの類義語に「畔 (φotori)」という語があるが、これは \*pata 系列と \*-la/-ra 系列の形が結合したものであろう。

物や場所の周縁を表すこれらの語には、それらと同源の形態を含む語、すなわちそれらの姉妹語が多く存在する。そのような語は、注目すべきことに、中国語や英語にも見いだされる。その一端を、日本語と比較しながら示してみよう。

|            |              |                                             |
|------------|--------------|---------------------------------------------|
| 端 (φata)   | 端 (tuān) 「端」 | -hedral 「～の辺・面からなる」 (Gk. <i>hédra</i> 「側面」) |
| 縁 (φuti)   | 蒂 (tì) 「へた」  |                                             |
| 蒂 (φeta)   |              |                                             |
| 畔 (φotori) |              |                                             |

これらは \*pata 系列の語である。中国語の端 (tuān) 「端」と蒂 (tì) 「へた」では祖形の第一音節に相当する部分が消失してしまっている。同様に、次の \*pala/para 系列の語においても、中国語の稜 (lóng) 「縁」は \*pa- に相当する部分を失っている。

|           |              |                                    |
|-----------|--------------|------------------------------------|
| 縁 (φeri)  | 稜 (lóng) 「縁」 | peri- 「近い・囲りの」 (Gk. <i>peri-</i> ) |
| 辺ろ (φero) |              |                                    |

一方、次の \*pana 系列の語においては事情が異なる。

|          |                             |                                |
|----------|-----------------------------|--------------------------------|
| 端 (fana) | 畔 (p <sup>h</sup> àn) 「ほとり」 | finis 「終わり」 (L. <i>finis</i> ) |
| 鄙 (fina) | 辺 (piān) 「縁」                | ante- 「前の」 (L. <i>ante-</i> )  |
|          | 縁 (yuán) 「縁」                |                                |
|          | 鄙 (pǐ) 「片田舎」                |                                |

これらの語はいずれも祖形の第一音節をとどめているが、中国語の鄙 (pǐ) 「片田舎」では祖形の第二音節が失われている。英語の ante- 「前の」における a- は祖形の \*pa- が、-n- は祖形の \*-na が弱化したものであり、-te- は「場所」を意味する \*-ta に由来する形であろう。なお、finis 「終わり」の -s はラテン語の格語尾に溯る形態である。

次に、\*paka 系列の例を示す。

|          |             |            |
|----------|-------------|------------|
| 奥 (oku)  | 奥 (ào) 「奥」  | back 「背・後」 |
| 横 (yoko) | 横 (xáy) 「横」 |            |
| 外 (foka) | 外 (wài) 「外」 |            |
|          | 後 (xòu) 「後」 |            |

これらの語のうち、中国語の奥 (ào) は、日本語での字音が「アウ」と「イク」であることから判断して、祖形の第一音節を引き継いだものであることが分かる。一方、横 ((háy)) は「クワウ」(漢音)と「クウ」(呉音)、外 (wài) は「グワイ」(漢音)と「ゲ」(呉音)、後 (hòu) は「コウ」(漢音)と「ゴ」(呉音)という字音を有するので、これらの語は祖形の第二音節を引き継いだものであることが知られる。

さて、ここからが本論である。「垂乳根」の起源にかかわる重要な事実、周縁を表す語からさまざまな語が派生する中で、内部が空洞の物や場所を表す語、そして「空っぽ」という意味を表す語が生まれたことである。内部が空っぽの物や場所は、周縁そのものからできているように見えるので、それに対して周縁を表す語があてられるようになったのである。このことは、たとえば中国語で「円」を意味する圓 (yuán) と「縁」を意味する縁 (yuán) との関係を考えてみれば納得されるであろう。下に、空洞、あるいは空っぽの物や場所を表す語を示してみよう。

\*pata 系列

|               |                              |                                          |
|---------------|------------------------------|------------------------------------------|
| 空・虚 (utu)     | 鉢 (pō) 「鉢」                   | path/pad 「道」                             |
| 空・虚・洞 (uturo) | 桶 (t <sup>h</sup> ōŋ) 「桶・樽」  | pot 「壺・鉢・瓶」                              |
| 器 (utuḥa)     | 洞 (tòŋ) 「穴・トンネル」             | bottle 「瓶」                               |
| 櫃 (ḥitu)      |                              | vat 「大桶」                                 |
| 罇 (tari)      | 天 (t <sup>h</sup> iān) 「天・空」 | dale 「谷」 (IE. *d <sup>h</sup> el- 「空洞の」) |
| 樽 (taru)      | 箱 (ciāŋ) 「箱」                 | tube 「管・筒」                               |
| 壺 (tubo/tuḥu) | 樽 (tsūn) 「桶・樽」               | tun 「酒樽」 (OE. <i>tunne</i> )             |
| 筒 (tutu)      |                              | tunnel 「トンネル」 (OE. <i>tonnne/tonne</i> ) |

谷 (tani)

「酒樽」)

## \*pala/para 系列

|              |                 |                                    |
|--------------|-----------------|------------------------------------|
| 腹 (para)     | 炉 (lú) 「いろり・火鉢」 | pore 「毛穴・気孔」                       |
| 瓜 (puri/uri) | 廬 (lú) 「飯びつ」    | poro- 「細穴」 (Gk. <i>póros</i> 「通路」) |
| 風呂 (puro)    | 落 (lù) 「ふぎ」     | bell 「鈴」                           |
| 洞 (pora)     | 路 (lù) 「道」      | belly 「腹」                          |
| 虚 (uro)      | 鈴 (líng) 「鈴」    | bowl 「鉢」                           |
|              | 窿 (lóng) 「穴」    | vale 「谷」                           |
|              | 輪 (lún) 「輪」     | room 「空間」                          |

## \*pana 系列

|         |              |                                    |
|---------|--------------|------------------------------------|
| 穴 (ana) | 圓 (yuán) 「円」 | antrum 「空洞」 (Gk. <i>antron</i> )   |
|         |              | anus 「肛門」 (IE. * <i>āno</i> 「輪」)   |
|         |              | end(o)- 「内・内部」 (Gk. <i>éndon</i> ) |

## \*paka 系列

|               |                              |              |
|---------------|------------------------------|--------------|
| 箱 (pako)      | 腹 (fù) 「腹」                   | pack 「包み」    |
| 袋 (pukuro)    | 服 (fú) 「服」                   | poke 「小袋」    |
| 麻笥 (woke)     | 櫃 (kuì) 「箱」                  | bag 「袋・カバン」  |
| 凹・窪 (kubo)    | 口 (k <sup>h</sup> ǒu) 「口」    | vacuum 「空っぽ」 |
| 口 (kutu/kuti) | 孔 (k <sup>h</sup> ǒu) 「穴」    | cave 「洞穴」    |
|               | 窟 (k <sup>h</sup> ū) 「洞穴」    |              |
|               | 空 (k <sup>h</sup> ōng) 「空っぽ」 |              |
|               | 虚 (cū) 「空虚」                  |              |

これらの例においてもまた、中国語では祖形を構成していた音節の一つが消失するか弱化して、すべて単音節化している。そこで結果的に、たとえば \*pata 系列の鉢 (pō) と桶 (t<sup>h</sup>ōng) のように、あるいは \*paka 系列の腹 (fù) と口 (k<sup>h</sup>ǒu) のように、両者を合わせると祖形に近い形になるのである。なお、腹 (fù) や服 (fú) が \*paka 系列の語であることは、日本語でのその字音が「フク」(漢音)であることによって明らかである。

音節の弱化と消失は、中国語以外の言語でも起こっている。しかし日本語の「樽 (taru)」や凹・窪 (kubo) のように、また英語の dale 「谷」や cave 「洞穴」のように、第一音節の消失に伴って新しい音節が語末に添加されているのが通例である。「器 (utuɸa)」や「袋 (pukuro)」のように、祖形の音節が失われていなくても新しい音節が加えられている語も多く存在する。

このように祖形にあった音節が消失したり、祖形になかった音節が添加されたという事実は、「垂乳根」の起源を解き明かすうえで決定的に重要である。筆者の考えでは、「垂乳根」の「垂 (tara)」は \*pata 系列の語である。すなわち、それは \*pata の \*pa- に相当する部分が

消失するとともに、語末に「場所」を表す -ra が付加されたものであり、その語形成の過程は上掲の「樽 (taru)」や dale 「谷」のそれと同じである。そしてその原義は、それらの語と同様に「内部が空洞の所」、すなわち「子宮」であったと考えられる。子宮をこのようなものとしてとらえるのは、それをまさに「子袋」と称したり、胃腸のことを「糞袋 (くそぶくろ)」, 膀胱のことを「尿袋 (ゆばりぶくろ)」と称したのと同じ発想である。

ここで「垂」の姉妹語をさらにいくつか示すことによって、「垂」の原義が「子宮・腹」であったという考えの裏付けをしておきたい。この点に関して第一にふれたいのは、

長野県北安曇郡に南小谷 (ミナミオタリ) 村, 北小谷 (キタオタリ) 村, 中谷 (ナカタリ, 中小谷 (ナカオタリ), 土谷 (ツチタリ) などという地名があり、谷をタリと読む。という山中襄太 (1976:328) の指摘である。よく知られているように滝のことを「滝 (taru)」と称する地域はあちこちにあるが、滝のない所でも「谷 (tari)」の付く地名があるという事実に加えて、これと同源の形態を含む地名がヨーロッパ語にも存在することを指摘しておきたい。たとえば、ピレネー山脈東部の溪谷にある Andorra 「アンドラ」という小国の名はその一つであり、この語における -dorra は英語の dale 「谷」と同源であり、インド・ヨーロッパ祖語の \*dhel- 「空洞の」に溯ると見なされる。なお、「滝 (taru)」は「垂れる・したたる」を意味する「垂る (taru)」とも同根であると思われるが、「垂る」と同根の英語としてインド・ヨーロッパ祖語の \*dhreu- 「落ちる・したたる」に溯る drop 「落ちる」, drip 「したたる」, droop 「垂れる」という語が存在することも指摘しておきたい。

さて、「タラ (鱈)」という魚の名前も「垂」と関係がありそうである。この語はタラの皮膚がまだらであることに由来するものであると一般に言われているが、そうではあるまい。それは、「たらふく (鱈腹) 食べる」という表現が示すように、タラの腹が突き出てふくれていることに由来するものであろう。

「タラ (樅)」という木の名前も同種の語である。吉田金彦 (2001) は、この木について「幹の真ん中が中空になっており、またくり抜きやすく、空気を送るのにも都合のよい木なのが特色である。鉄の製錬に使用したと考えられる。とすればタタラに使う木からタタラノキが略されて、タラノキとなった、とも見られる」と述べているが、「タラ」は幹が中空であることに注目した名前であると見るのが妥当であろう。

「空 (sora)」という語も、「垂」と同源である。この語は、「空耳」とか「空言」といった表現からもうかがえるように、空を空っぽの空間としてイメージしたものであり、同種の語として、「手の加わっていないさま」を意味する「更・新 (sara)」や「底にたまった土砂などを取り除く」という意味の「浚ふ (saraふ)」をあげることができる。また、本来は「跡形もなくすっかり」という意味を表した「只管 (φitasura)」の「管 (sura)」もこれらに類する形態であり、その原義は「空洞」である。さらに「白 (siro)」という語も、「無色」という意識に根ざした、「垂」と同源の語と見なしうる。それにしても、これらの語は「垂」と形態的に似ていないように思われるかもしれないが、[t] > [s] という変化、あるいはこ

れに類する音変化は多くの言語に観察されるきわめて自然な変化であるので、それらを同源と見なすことに問題はない。なお、古代日本語の「さ・し・す・せ・そ」の音価は〔tsa・tsi・tsu・tse・tso〕であるとも、「ja・ji・ju・je・jo」であるなどとも言われ、確定しがたいので、本稿ではそれを〔sa・si・su・se・so〕と表記していることを断っておく。

「垂」と同源で、内部が空洞のものを表す語としても一つ、「尻・後 (siri)」という語をあけておこう。「穴・尻 (ketsu)」という俗語がそうであるように、この語の本来の意味は「肛門」であり、「うしろ・あと」という意味はそれから派生した第二義的な意味である。同じことは、「後 (usirō)」という語についても言えそうである。この語について『岩波古語辞典』は「ミ (身) の古形ムと、シリ (尻・後) の古形シロとの結合したムシロの転」としているが、「ムシロ」という語形の存在が確認されているわけではない。「後 (usirō)」は、アイヌ語の osor 「尻」もそうであるが、「空・虚 (usu)」や「空・虚・洞 (uturo)」の姉妹語としてとらえるべきであろう。つまり、「後 (usirō)」は「尻 (siri)」と同様にもともと内部が空洞な物あるいは場所を表す語であり、この語における usi- は穀物をつき砕くための器物を表す「碓・臼 (usu)」や、「へそ」を意味する「臍 (φoso)」に対応する形態であると見なされる。

このような理解は、「いなうしろ (inausirō)」という謎めいた枕詞の意味を解明することにもつながる。

ひこぼし たなぼたつめ あめつち  
牽牛は 織女と 天地の 別れし時ゆ いなうしろ 川に向き立ち 思ふそら  
安からなくに…… (『万葉集』 1520)

「いなうしろ」は「川」にかかる枕詞であり、写本では「伊奈宇之呂」と表記されている。そして、「いなうしろ」は稲わらで編んだ「稲筵 (inamusirō)」の誤りであるとか、その語に含まれる〔m〕という音が脱落した形であると言われている。このように解釈されるのは、一つには、「いなむしろ」を「川」にかかる枕詞として用いている例が日本書紀の歌謡に見いだされるからである。また一つには、『万葉集』でも写本によっては「伊奈宇之呂 (いなうしろ)」ではなくて「伊奈牟之呂 (いなむしろ)」と表記されているからである。それにしても、稲わらで編んだ敷物を表す語がどういうわけで「川」にかかっているのか分からないので、一般にかかり方不詳とされているのである。

しかし筆者に言わせれば、敷物を表す「いなむしろ」は次のようにして「川」と結びついている。すなわち、敷物は地面や床に敷くもの、つまり地面や床を覆うものであるから、そのようなものを表す「いなむしろ」はまず最初に動物や植物の表皮、すなわち同じ「覆うもの」を表す「皮・革 (kaφa)」を連想させる。そして次に、「皮・革 (kaφa)」が同音の「川 (kaφa)」を連想させる。このように、「いなむしろ」と「川」は「皮・革」という語が介在することによって結ばれているのである。

問題は「いなうしろ」である。これをどう解釈したらよいのか。筆者がおし進める立論は次のとおりである。

「いなうしろ」は「いなむしろ」の誤りでもなければ、「いなむしろ」が変化したものでも

ない。上に引いた万葉歌の作者は「いなむしろ」が「川」にかかる枕詞であることを知りながら、それを「いなうしろ」に変えたのである。「こうした方が枕詞としてふさわしい」という思い、あるいは「枕詞を変えたが、そのかかり方が分かるか」という気持ちを込めてそうしたのかもしれない。いずれにせよ、「いなうしろ」は「いなむしろ」とは異なる意味を表したはずである。

私見では、「いなうしろ」の「いな」は「稲」を意味し、「うしろ」は「空・虚・洞 (uturo)」と同源で「空っぽ」あるいは「空っぽのもの」を意味した。つまり、「いなうしろ」は「籾殻」のことであつた。「籾殻」の「殻」によって類義語の「皮・革」が想起され、「皮・革」によって同音の「川」が想起される。「いなうしろ」は、このような連想をねらった枕詞である。

しかしながら、作者のねらいははずれた。確かに、「いなむしろ」とするより「いなうしろ」とする方が枕詞として素直である。つまり、「川」へのかかり方がいくぶん容易に理解される。しかしいかんせん、「いなうしろ」の意味が不透明であつた。そして、やがて通じなくなってしまった。そこで、写本を転写する中で、「いなむしろ」に戻される場合があつたのである。これは筆者の推定にすぎないが、こう考える以外、道筋を立てて説明する手当てがない。

さて話を「垂」に戻し、「垂」と同源の語を日本語以外の言語に探してみよう。そのような語はあちこちに見つかる。たとえば、インドのドラヴィダ語族のクウィ語における *dālu-gara* 「子宮」の *dālu-* やトルコ語における *döl yatağı* 「子宮」の *döl* は、そのような語であると思われる。これらは日本語の「垂」や「樽」と同様に \**pata* 系列の語であり、祖形の第一音節が消失するに伴い、語末に新しい音が添加された形態であると仮定される。

「垂」と同源で、「子宮・腹」と関係がありそうに思われる語は中国語にも存在する。一つは、「胞衣(えな)」すなわち胎児を含む薄い膜を表す胞 (*pāo*) である。そしてもう一つは、「胎児」を意味する胎 (*tāi*) である。これらは \**pata* 系列の語であり、胞 (*pāo*) は祖形の第一音節を引き継いだ形であろう。一方、胎 (*tāi*) は祖形の第二音節を引き継いだ形であると見なされるが、語末の *-i* の出自は分からない。

「垂」と同源の形態はヨーロッパの言語にもいくつか存在する。先に言及した英語の *dale* 「谷」はその一つである。また、英語の *troglo-* 「洞窟」(Gk. *tróglē* 「ほら穴」) の *tro-* や、火山中央にある鍋状の窪地を表すスペイン語の *caldera* 「カルデラ」の *-dera* もそのような例である。なお、*troglo-* の *glo-* と *caldera* の *cal-* は上に示したクウィ語の *dālu-gara* 「子宮」の *-gara* と同源であるが、これらは後でもふれるように内部が空洞の物や場所を表す形態である。

「垂」と同源で、「子宮・腹」を意味する形態もヨーロッパの言語に存在することを指摘しておきたい。英語の *uter(o)-* 「子宮」や *uterus* 「子宮」(L. *uterus*) などがそれである。インド・ヨーロッパ祖語の \**udero-* 「腹・子宮」に溯るとされるこれらの形は、日本語の「空・虚・洞 (uturo)」という語と酷似している。これらは祖形が同じで、語形成の過程が基本的に同じであるから似ているのである。

「子宮」を意味する語として古期英語に *fapm* 「胸・子宮・内部」や *hreper* 「胸・子宮・心臓」という語が存在したことにもふれておきたい。*fapm* の *fap-* は *\*pata* 系列の形態で、日本語の「空・虚 (*utu*)」や「礁・臼 (*usu*)」に対応する形であると考えられる。また、*hreper* は上述のスペイン語 *caldera* 「カルデラ」に対応する形態である。(*「グリムの法則」*が教えるように、ゲルマン諸語の *h* と *p* (*th*) の音は、それぞれインド・ヨーロッパ祖語の *k* と *t* の音に溯る。)そして、これらの語における *hre-* と *cal-* はインド・ヨーロッパ祖語の *\*kel-* 「覆う・隠す」に通じる形態であり、英語の *hole* 「穴」や *hollow* 「空洞の」と、また古期英語の *hrif* 「子宮・体内・胃袋」における *hri-* などとも同源であると見なされる。一方、*hreper* の *-per* は前述した英語の *uter(o)-* 「子宮」や *dale* 「谷」(I. E. *\*dhel-* 「空洞の」と、また日本語の「空・虚・洞 (*uturo*)」や「樽 (*taru*)」と同源であると見てほぼ間違いない。ということは、*-per* は「垂乳根」の「垂」とも同源だということになる。

「垂乳根」の「垂」の原義が「子宮・腹」であったことを確認したうえで、「垂乳根」の「乳根」に目を転じるが、これもまた「子宮・腹」というのがその原義であったのではないかと思われる。そして筆者の想定では、「乳根」は「垂」と同様に *\*pata* 系列の形態である。しかし、「垂」が祖形を引き継いだ *ta-* に「場所」を表す *\*-la/-ra* 系列の音節が添加された形であるのに対して、「乳根」は同じ祖形を引き継いだ *ti-* に「場所」を表す *\*-na* 系列の音節が添加されたものである。

さて、「乳根」の原義が「子宮・腹」であったというのは仮定であり、これを事実として認めるためには、「乳根」と類似する形態の中から内部が空洞の物あるいは場所を表す語を探さねばならない。「乳根」の姉妹語と見なされる語はいくつか存在するが、*\*pata* 系列の語として先に示した「谷 (*tani*)」はそのような語の一つである。また、この語の語形成は英語の *tun* 「酒樽」や古期フランス語の *tonne* 「酒樽」のそれと同じであり、この語の原義は同じ *\*pata* 系列に属する英語の *dale* 「谷」や *\*pala/para* 系列に属する英語の *vale* 「谷」と同様に「空洞ようになった所」、すなわち「山あいの窪地」であった。

「御殿」を意味する「殿 (*tönö*)」も「乳根」の姉妹語であろう。同じ「御殿」を意味する「台 (*utena*)」も「乳根」と同源であるが、これは祖形における第一音節の痕跡をとどめている。これらの語は伽藍堂のようにがらんとしたさまを描写した語であると考えられる。ちなみに、「寺 (*tera*)」というのも「殿」と同じイメージを喚起する語であるが、これは上で論じた「垂」や朝鮮語の *tior* 「寺」と語形成の過程が同じであると見てよい。

「乳根」のもう一つ別の姉妹語として、「角 (*tuno*)」をあげることができる。この語の成り立ちも、角の内部が空洞であることと関係があるように思われる。このことは、英語の *horn* 「角・角笛」がインド・ヨーロッパ祖語の *\*ker-* 「頭・角」に溯ることからも傍証が得られる。この *\*ker-* は、日本語の「殻 (*kara*)」や朝鮮語の *kol* 「谷・洞」と、またフランス語の *col* 「山の鞍部」やスペイン語の *caldera* 「カルデラ」の *cal-* や英語の *troglo-* 「洞窟」の *-glo-* などと同源で、物や場所などの内部が空洞であることを表す語である。中国語の角

(tciǎo)「角(つの)」も「乳根」とは祖形が異なるが、その原義は「空っぽ」であったように思われる。これは「角」の日本語での字音が「カク」(漢音・呉音)と「ロク」(漢音)であることからうかがえる。「カク」は「殻・外皮」を意味する殻(kǎ)の日本語での字音「カク」(漢音・呉音)と同じであり、「ロク」は「肋(あばら)」を意味する肋(lǐ)の日本語での字音「ロク」(漢音・呉音)と同じである。

「乳根」の姉妹語は日本語以外の言語にも見つかる。中国語の樽(tsūn)「桶・樽」, 洞(tòng)「ほら穴」, 筒(tǒng)「つつ」に「空洞」という意味が内包されていることは言をまたない。山中襄太(1976)は角(つの)の空洞が酒樽または酒杯として利用されたと考え、tun「酒樽」の原義を「角」と見ているが、その原義は「空っぽの物」であったと見なすのが妥当である。

「垂乳根」の原義が「子宮・腹」であったことについての論述はここで閉じるが、「子宮・腹」をめぐる考察はまだ道半ばである。

## 2. 覆いと覆われたもの

「子宮・腹」を意味する語から一連の語が生みだされた。これは本稿で取りあげるべき重要な問題である。しかし、このことについて論を急ぐわけにはいかない。事の順序として、いくぶん冗長な前置きを述べることから始めなければならないからである。前置きとは、周縁を表す語の、上で考察したのとは異なる意味変化についてであり、もっぱらこのことを論じるための一節として本節をおく。

さて周縁を表す語は、内部が空洞のものや場所を表すようになったのとは別に、あるいはそれと並行して、物・場所・身体表面や、それらを覆っているもの、あるいはそれらを取り囲んでいるものを表すようになった。表面や覆いや囲いというのはその内部から見れば周縁そのものであるから、周縁から表面への変化、そして周縁から覆い・囲いへの変化は起こるべくして起こった変化である。

「頬・面(tura)」という語はそうようにして生まれた語の一つである。この語は古代日本語では「頬(ほほ)」または「顔」を意味したが、その原義は「身体表面」であったと考えられる。頬と顔は常に露出していて、体表の中でいちばん目につきやすい部分であるので、そのように呼ばれるようになったと想像される。

「頬・面」と同源の形態として、「貫く(turanuku)」の「tura-」があげられる。『岩波古語辞典』はこのtura-を「連ぬ(turanu)」や「連なる(turanaru)」の「連(tura)」の意味であるとしているが、その原義は「表面」であり、「貫く」とは「一方の表面から他方の表面へ通す」というのが本来の意味であったと見るべきであろう。

ところで、「頬・面」や「貫く」のtura-は「垂乳根」の「垂」と同様に \*pata 系列の祖形における第一音節が消失し、語末に「場所」を意味する -ra が付加された形であると想定さ

れるが、これと同じ祖形から派生した語に「頬 (φoφo)」と「土 (tuti)」があることを指摘しておきたい。前者は祖形の第二音節に相当する部分が消失し、第一音節に相当する部分が二つ重ねられた形であろう。後者は反対に、同じ祖形の第一音節に相当する部分が消失し、第二音節に相当する部分が二つ重ねられた形であろう。そして、「頬」の原義が「身体の表面」であったのに対して、「土」の原義は「土地の表面」すなわち「地表」であったと考えられる。

祖形における二つの音節の一方だけを残している語はほかにも見いだされる。たとえば「覆ふ (oφoφu)」という動詞の「覆 (oφo)」は、上述の「頬 (φoφo)」と同様に祖形の第一音節を引き継いだものである。一方、「覆ふ」の類義語である「包む (tutumu)」の「包 (tutu)」は「土 (tuti)」や「筒 (tutu)」と同様に祖形の第二音節を引き継いだものであり、これは同じ祖形の第一音節を継承した中国語の包 (pāo)「包む」とまったく異なる形をしている。そして、何かの表面に対して何かをぶつけることを表す「叩・敲く (tataku)」の「叩・敲 (tata)」は祖形の第二音節を継いだ形であるが、これは同じ第二音節を継いだ中国語の打 (tǎ)「打つ・叩く」とよく似た形をしている。なお、『岩波古語辞典』は「叩・敲く」の「叩・敲 (tata)」を擬音語としているが、この説は受け入れ難い。

祖形の二つの音節を温存している語が存在することも指摘しておかねばならない。その一つに「膚 (φada)」がある。この語が \*pata 系列の語であることは明白であろう。そして、これと同源の語として「皮をはぐ」という意味の「削る (φaturu)」,「こする・搔く」を意味する「はだく (φadaku)」,「(手足・裾などを) 開き広げる」を意味する「開く (φadaku)」などをあげることができる。「表面」という意味と関係する \*pata 系列の語としてさらに、「太し (φutosi)」と「厚し (atusi)」を追加することができる。これらの語は「太 (φuto)」と「厚 (atu)」に形容詞語尾の「し (si)」が付加されたものである。そして、「太し」はおそらく「表面がふくらんでいるさま」を形容した語として始まったものであり、「厚し (atusi)」は「太し」の異形体が新しい意味を獲得して生まれたものであると考えられる。

上に例示した語と究極的に同源と見なされる語がヨーロッパの言語にも存在することを指摘しておきたい。英語の derma「皮膚・皮膚病」(IE. \*der-「皮をむく」)は \*pata の \*pa- に相当する部分が消失し、語末に「場所」を意味する -ma が添加された形であり、der- の形成過程は日本語の「頬・面」のそれと同じであろう。同様に、英語の through「～を通して」という前置詞や trans-「越えて・向こう側に・貫いて」という動詞接頭辞の祖形として想定されるインド・ヨーロッパ祖語の \*terə「渡る」は、日本語の「貫く」の tura- と同源であろう。英語の intra-/intro-「内部に」の祖形である \*entro- の -tro- も同様である。

次に、周縁を表す語が物の覆いや場所の囲いを表す名詞、あるいは物を覆ったり場所を囲ったりすることを表す動詞について述べる。このような語として最初に取りあげるのは、「蓋 (φuta)」と「懷 (φutokoro)」である。φuta と φuto- は上述の「肌 (φada)」と同じ \*pata 系列の形態であるが、-koro は「衣 (koromo)」の koro- や「包む (kurumu)」の kuru- と同源の形態である。そして、これは cloth「布」の clo- や include「含む」の -clu- とも同源

であろう。

さて、次は「捕・執・捉ふ(toraφu)」についてである。この語の原義は綱や手で「包みこむ」であり、語幹の tora- は上述の「頬・面(tura)」と語形成の過程が同じである。「蔓(turu)」というのもこれと同種の形態で、この語の原義は「木の幹や枝に巻きつくもの」あるいは「木の幹や枝を覆うもの」であったと思われる。そしてこれらの語から、「連ぬ(turanu)」や「連なる(turanaru)」という動詞が派生したと考えられる。「連ぬ」や「連なる」から「蔓」が派生したというのが通説のようだが、この考えには賛成できない。

「蔓」のついでにふれておきたいのは、

玉匣たまぐしげ 二上山ふたがみに 延はふつた蔦がよの 行きは別れず あり通がよひ……(『万葉集』3991)

に見える「蔦(tuta)」という語である。「蔦」というのは、蔓性で物を覆う性質のある植物を表す語である。私見では、この語の成り立ちは前述の「土」という語のそれと同じである。そして、この語から「伝ふ(tutaφu)」という動詞が派生した。しかし「蔦」と「伝ふ」に関しても、「伝ふ」から「蔦」が派生したという考えが有力な説として受け入れられている。

「蔓」や「蔦」との関連で、「綱(tuna/tuno)」という語にもふれておきたい。この語の原義は、「巻きつけるもの」あるいは「縛るもの」であったと想像される。また、この語の形成過程は「垂乳根」の「乳根」の姉妹語として先に取りあげた「殿(tönö)」や「角(tuno)」の形成過程と同じであったと考えられる。なお、「綱」は「繋ぐ(tunagu)」という動詞の派生語であるという説が見受けられるが、むしろ「綱」から「繋ぐ」が派生したと見るのが妥当であろう。

以上のように周縁を表す語は物や場所や身体の表面、あるいはそれらを覆っていたり囲っていたりするものを表すようになったが、これがさらに別の意味変化を惹起した。

物の表面・覆い・囲いは、しばしば物の輪郭を作る。そして、輪郭は物の形を作り、その形からしばしば物の名前が作られる。こうして、表面・覆い・囲いを表す語が物の内部をも含めた総体を表すようになる。このような変化の結果として、たとえば中国語の縁(yuán)「縁」と同源の圓(yuán)「円」という語は円の周縁を含めた内部をも表しうようになった。この語と同源の園(yuán)「畑・園」という語の意味もそのような過程を経たものであるにちがいない。また、それと同源ではないが、「陣営」を意味する屯(t<sup>h</sup>ún)や村落を意味する村(ts<sup>h</sup>ün)という語も「囲いとその内部」、つまり「囲われた土地」というのが原義であったと考えられる。

同種の例は日本語にも見いだされる。「筒(tutu)」や「包む(tutumu)」と同根で「包まれたもの」を意味する「苞・裏(tuto)」はそういう語の一つである。果樹・野菜などを育てる庭園を表した「園(sönö)」も同種の語であり、「囲われた土地」というのがその原義であったと考えられる。またこの語は、その語頭音[s]が[t]に由来する音であったと想定されるので、上述の「乳根」や「殿」と同じ祖形に溯る語であると見なされる。さらにこの語は、上に示した中国語の屯(t<sup>h</sup>ún)や村(ts<sup>h</sup>ün)とも同源であると推定される。

さて、上述のように表面・覆い・囲いを表す語からその内部をも含む全体を表す語が派生

したのに続いて、さらに別の変化が起こった。全体から表面・覆い・囲いの部分が引き剥がされ、囲われている内部、覆われている中身あるいは人に焦点が当てられるようになったのである。たとえば上掲の「御殿」を意味した「殿 (tönö)」という語は、

稲<sup>つ</sup>春<sup>か</sup>け<sup>あ</sup>ば<sup>こ</sup>輝<sup>よ</sup>る<sup>ひ</sup>吾<sup>わ</sup>が<sup>く</sup>手<sup>ご</sup>を<sup>こ</sup>今夜<sup>よ</sup>も<sup>こ</sup>か<sup>ひ</sup>殿<sup>ひ</sup>の<sup>わ</sup>若<sup>わ</sup>子<sup>こ</sup>が<sup>く</sup>取<sup>ご</sup>り<sup>こ</sup>て<sup>ひ</sup>嘆<sup>な</sup>か<sup>む</sup>む (『万葉集』 3459)

のように、立派な邸宅とそこに住む貴人の両方を表すようになった後に、邸宅とは関係なく一般に身分の高い人を表すようになり、さらに「主君」という意味を表すようになった。「殿」と同源の「種 (tane)」という語も、その背後に同種の変化が隠されていると思われる。そしてこれと同じ変化は、中国語で「縁」を意味する縁 (yuán) から「円」を意味する圓 (yuán) や「畑・園」を意味する園 (yuán)、また塀などに囲まれた庭・空地や公共の機関・建物を表す院 (yuán) などの語が派生し、さらにそれから集団の構成員を表す員 (yuán) という語が派生した変化にも見ることができる。

このように表面・覆い・囲いを表す語と同源で、「覆われたもの」や「囲われたもの」を表す語、またそれから派生した語はいくらでも見つかる。「裏・心 (ura)」という語はそのような語の一つである。

う<sup>も</sup>ら<sup>づ</sup>も<sup>づ</sup>無<sup>も</sup>く<sup>づ</sup>わ<sup>づ</sup>が<sup>づ</sup>行<sup>も</sup>く<sup>づ</sup>道<sup>づ</sup>に<sup>づ</sup>青<sup>も</sup>柳<sup>づ</sup>の<sup>づ</sup>張<sup>も</sup>り<sup>づ</sup>て<sup>づ</sup>立<sup>も</sup>て<sup>づ</sup>れば<sup>づ</sup>物<sup>も</sup>思<sup>づ</sup>ひ<sup>づ</sup>出<sup>も</sup>つ<sup>づ</sup>も (『万葉集』 3443)

「裏・心」は、平安時代までは「表面・外見」を意味する「上 (uφa/uφe)」あるいは「上辺 (uφaφe)」の対をなす語として「内側」とか「内心」という意味を表した。そして、この語は \*pala/para 系列の語として、内部が空洞の場所を表す「洞 (φora)」や「虚 (uro)」と、また海や湖の湾曲した所を表す「浦 (ura)」や魚などの体表を覆っている薄い小片を表す「鱗 (iroko/uroko)」の -iro/-uro と同源である。またこの語は、「憂ふ (ureφu)」や「うらむ (uramu)」や「羨む (urayamu)」といった語を構成する要素となっているだけでなく、「欲る (φoru)」や「惚・悦る (φoru)」といった動詞の成り立ちにもかかわっているように思われる。

「裏・心」と推量を表す助動詞「らむ (ramu)」や「らし (rasi)」とのかかわりも見逃すことができない。

旅<sup>よ</sup>に<sup>ひ</sup>あれ<sup>と</sup>ど<sup>を</sup>夜<sup>を</sup>は<sup>や</sup>火<sup>い</sup>燭<sup>も</sup>し<sup>も</sup>居<sup>も</sup>る<sup>も</sup>わ<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>を<sup>も</sup>闇<sup>も</sup>に<sup>も</sup>や<sup>も</sup>妹<sup>も</sup>が<sup>も</sup>恋<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>あ<sup>も</sup>る<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>む (『万葉集』 3669)

春<sup>き</sup>過<sup>し</sup>ぎ<sup>ろ</sup>て<sup>た</sup>夏<sup>ほ</sup>来<sup>あ</sup>る<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>白<sup>あ</sup>栲<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>衣<sup>あ</sup>乾<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>たり<sup>ま</sup>天<sup>あ</sup>の<sup>ま</sup>香<sup>あ</sup>具<sup>ま</sup>山 (『万葉集』 28)

「らむ」は \*pala/para 系列の祖形における第一音節が脱落したものであり、アイヌ語の ram 「心」や raman 「思う」や iramu 「思われる」とも比較されるべきである。一方、「らし」は同じ祖形の第一音節が脱落するとともに形容詞に相当する「し」が付加されたものであると推定される。

「裏・心」という語は、アイヌ語以外の言語ともつながっているようである。この語は、先に示した英語の belly 「腹」や vale 「谷」と同源であろう。またおそらく、古期英語の frig 「愛」の fri- とも同源であろう。そして、これらの形態はインド・ヨーロッパ祖語の \*wel- 「欲する」に溯る英語の will 「～だろう」やドイツ語の wollen 「欲する」などの語の形成にもあずかっていると考えられる。さらに言えば、英語の love 「愛する」(IE. \*leubh-) という語も

これらと同じ \*pala/para 系列の語であり、祖形における第一音節が消失するのに伴い、語末に新しい音が添加されて生まれた形態であると推定される。なお、これらの語と歴史的に対応すると言えそうな中国語は、祖形の第一音節を引き継いだと見なされる憂 (yōu)「憂う」や浦 (p<sup>h</sup>ü)「水辺・浦」、祖形の第二音節を引き継いだと見なされる浦 (li)「中・内部」、料 (liào)「推し量る」、量 (lián)「推し量る」、慮 (lù)「考慮する」などである。

次に、「裏・心」に類する意味を表す語として、人間や物の精霊を表す「魂 (tama)」という語の存在を指摘しておきたい。この語は「溜まる (tamaru)」の tama- や「詰まる (tumaru)」の tuma- や「伴ふ (tömönaφu)」の tömö- と同源の \*pata 系列の形態であり、その原義は「内部に包まれたもの」であったと見なされる。ちなみに、中国語の胆 (tǎn)「肝 (きも)・魂・気力」は日本語の「魂 (tama)」と同源であるが、魂 (hún)「靈魂」は含 (hán)「含む」や梱 (k<sup>h</sup>ün)「くくる」と同じ \*paka 系列の語である。しかしその原義はやはり「内部に包まれたもの」であったとすることができる。

ところで、「内部に包まれたもの」という概念は次の歌に見える「たまきはる (tamakiφaru)」という枕詞の意味を探るうえでも有効である。

たまきはる宇智<sup>おほの</sup>の大野<sup>な</sup>に馬並めて朝踏ますらむ<sup>くさふかの</sup>その草深野 (『万葉集』4)

「たまきはる」は『万葉集』では「うち」や「命」にかかる枕詞としてしばしば用いられたが、一般に語義不詳ないしはかかり方未詳の語として扱われている。『岩波古語辞典』はこの枕詞について「かかり方未詳」としたうえで、「タマは魂、キハルは刻む、または極まる」としているが、この解釈はどうかと思われる。「たまきはる」の「たま」は「魂」であろうが、「きはる」の「きは」は「涯・際 (kiφa)」のことであり、「きはる」とは「際を立つ」こと、すなわち「境界や限界を設けて、範囲を限定する」(『岩波古語辞典』)という意味を表したのではあるまいか。そうであれば、「たまきはるうち」とは「魂を宿す内部」、「たまきはる命」とは「魂を宿す命」ということになるだろう。なお言うまでもないことだが、上に引いた万葉歌において「たまきはる」が地名の「宇智」にかかっているのは、「宇智」という地名が「内部」を意味する「うち」と同音であることによるものである。

さて、「内部に包まれたもの」ということであれば、「種 (tane)」もそのようなものを表す語ということになるが、これは前述の「殿 (tönö)」や「綱 (tuna/tuno)」と語形成の過程が基本的に同じである。また、「種」の類義語に「実・核 (sane)」という語があるが、この語における語頭音の [s] は [t] に由来する音であると推定される。そして、この語は中国語の芯 (cīn/cìn)「芯」と比較されるべきである。同様に、「稲 (sine)」は「籾殻に覆われたもの」というのが原義であり、この語は中国語の籼 (ciān)「うるち米」と関係があろう。また、「生まれつき持っている性質・天性」を意味する「しね (sine)」と関係がありそうな中国語は心 (cīn)「心」であり、その原義は「体の中に隠され、包まれているもの」であったと考えられる。ちなみに「心 (kokoro)」という日本語は、『岩波古語辞典』では「生命・活動の根源的な臓器と思われていた心臓。その鼓動の働きの音が原義」と説かれているけれ

ども、この語は「括る (kukuru)」や「包む (kurumu)」と語根が同じであり、その原義は「体内に包まれているもの」であつたと見るのが順当であろう。インド・ヨーロッパ祖語の \*kerd-「心臓」に溯るギリシア語の kardíā「心臓・胃」や英語の heart「心臓・心」に関しても、その成り立ちは日本語の「心」と基本的に同じであるということを付言しておきたい。

その原義が「覆われたもの」あるいは「囲まれたもの」であつた語、またそのような語から派生したと見なされる語をさらに追加すれば、中国語の

身 (shēn/tcuān)「体・身体」(漢音・呉音：シン／ケン)

神 (shēn)「神」(漢音：シン，呉音：ジン)

娠 (shén)「妊娠する」(漢音・呉音：シン)

信 (cìn)「信じる」(漢音・呉音：シン)

羨 (xiàn/yǎn)「羨む」(漢音：セン，漢音・呉音：エン)

申 (shēn)「申し述べる」(漢音・呉音：シン)

辛 (cīn)「辛い・苦しい」(漢音・呉音：シン)

侵 (qīn)「侵す」(漢音・呉音：シン)

真 (zhēn)「真実 (の)」(漢音・呉音：シン)

など、「垂乳根」の「乳根」と形成過程が類似している語をあげることができる。身 (shēn) は衣服に覆われたものであり、神 (shēn) はどこかに隠れ潜んでいるもの、娠 (shén) は体の中に別の体を宿すことである。また、信 (cìn) は思いを心の中に秘めていること、羨 (xiàn) は妬ましい思いを心に抱くこと、申 (shēn) は心に秘めていることを吐露することであり、辛 (cīn) は苦しみを心に抱くこと、侵 (qīn) は囲まれたものの中に侵入することである。そして、真 (zhēn) は表層の中に隠されているものである。

ついでに言っておくと、日本語の「偲ふ (sinoфу)」と「忍ぶ (sinobu)」もこれらと同源の形態を含む語である。これらには、中国語の思 (sī)「思う」と同様に「思いを心に秘める」という意味あいがある。一方、「凌ぐ (sinogu)」は、『岩波古語辞典』では「ふみつけ、おさえる意が原義」とされているが、むしろその原義は「覆いかぶさる」であつたと見るべきであろう。同様に、「欠けるところなく身につける」などを意味する「備ふ (sonaфу)」は「身を覆う」が原義であつたと考えられる。なお、上述の辛 (cīn)「辛い・苦しい」という中国語に意味のうえで対応する日本語は「辛し (turasi)」であるが、この語の語幹 tura- は先述の「頬 (tura)」や「蔓 (turu)」と形成過程が同じである。

### 3. 母と子、そして兄弟姉妹たち

上で述べたように「覆い・覆われたもの」あるいは「囲い・囲われたもの」という概念に根ざした語は数多く見いだされるが、その中にここからの議論において重要な意味を持つ語

がいくつも含まれている。それらは、「子宮・腹」を表す語から派生した「母」や「子」や「兄弟姉妹」などを表す語である。

そのような語の中にあってその来歴がもっとも明確な語の一つは、ラテン語の *fētus/foetus* 「子・子孫」と、これを借用した英語の *fetus/foetus* 「胎児」である。従来の語源辞典はこれらの語の起源をインド・ヨーロッパ祖語の *\*dhēi-* 「吸う」に求めているが、これはまったくの見当違いである。これらの語の語幹は、ラテン語を借用した英語の *uterus* 「子宮」の *ute-* や古期英語の *fapm* 「胸・子宮・内部」の *fap-* と、そしてインド・ヨーロッパ祖語の *\*udero-* 「腹・子宮」の *\*ude-* と同源であろう。したがって、ラテン語の *fētus/foetus* 「子・子孫」と英語の *fetus/foetus* 「胎児」は、器としての子宮の名前がその中身であった子、あるいはその中身である胎児を表すようになった例として理解されねばならない。

これと同じことは、ギリシア語の *paid(o)-* 「子供」と、これを借用した英語の *p(a)edo-* 「子供」についても言える。従来の語源辞典はこれらをインド・ヨーロッパ祖語の *\*pau-* 「小さい・少ない」に溯ると見ているが、この説には賛成しがたい。これらは上述の *\*udero-* 「腹・子宮」の *\*ude-* や *fētus/foetus* 「子・子孫」の *fēt-/foet-* と同源の形態、いわばそれらの古形に相当する形態であると見るのが妥当であろう。

インド・ヨーロッパ祖語の *\*udero-* 「腹・子宮」の *\*ude-* と同源で「人」を表す語は、日本語にも存在する。次にあげる語はそのような語ではないかと思われる。

処女 (*wötöme*) 「未婚の少女・宮廷に仕える若い官女・舞姫」

男 (*wötöko*) 「結婚期にある若い男性・立派な一人前の男性」

弟・乙 (*ötö*) 「(兄に対する) 弟・(姉に対する) 妹」

従父兄弟 (*itöko*) 「父母の兄弟の子」

「処女」と「男」は、古くは対をなす言葉であったと言われている。そして定説によれば、これらの語を構成する *wötö-* は、

<sup>いにしへ</sup>古ゆ人の言ひくる<sup>おいひと</sup>老人の変若つといふ<sup>を</sup>水そ負ふ<sup>お</sup>滝の瀬 (『万葉集』1034)

に見える「変若つ」、すなわち「若々しい活力が戻る・生命が若返る」を意味する動詞の「変若つ (*wotu*)」と同源である。これに対して「弟・乙」は、「落す (*ötösu*)」や「劣る (*ötöru*)」の *ötö-* と同源であると言われる。

しかし筆者に言わせれば、「処女」や「男」は、そして「弟・乙」も、「空・虚 (*utu*)」や「空・虚・洞 (*uturo*)」あるいは「女陰 (*phötö*)」と比較されるべき語であり、そこには「子宮・腹」という意味が内包されていた。そして、「処女」と「男」の原義は「子宮・腹から出てきて間もない子」であり、「弟・乙」の原義は「同じ子宮・腹から出てきた子」、すなわち「同腹・同母の子」であったと見なされる。また、「従父兄弟」というのは「同腹・同母の子の子」であるから、それを *ötö* の母音交替形を用いて *itöko* と称するようになったと考えられる。

なるほど「変若つ」という動詞は「処女」や「男」と同根のように思われるが、派生の順序としては「処女・男」から「変若つ」が生まれたと考えるほうが自然であろう。むしろ、

「変若つ」の原義は「子宮・腹に返る」であつたと見なす方が適切かもしれない。なお、「弟・乙」に関して「子宮・腹」という意味から「同腹・同母」という意味が派生したという仮定は、インド・ヨーロッパ祖語の \*udero-「腹・子宮」を継承した英語の uterine が「子宮の」という本来の意味とは別に「同母の・母方の・母系の」という意味を表すことから傍証を得ることができる。ついでに言うておくと、「弟」を意味する中国語の弟 (tì) は「弟・乙」と同源で、祖形の第一音節が脱落した形であると推定される。

インド・ヨーロッパ祖語の \*udero-「腹・子宮」の \*ude- と同源で「人」を表す日本語はほかにも存在する。「氏 (udi)」はその一つである。

……おぼろかに 心思ひて 虚言も 祖の名断つな 大伴の 氏と名に負へる  
ますらを  
 丈夫の伴 (『万葉集』 4465)

「氏」とは「一族・同族」のことであつた。母系制社会を構成していた大昔の人々は、同じ血縁関係にある者の集まりを「同じ子宮・腹から生まれた人々」と認識し、それを「氏」と称したのではあるまいか。『古事記』に現れる神「天宇受売 (amenōudume)」の「宇受 (udu)」も同種の語であろう。なお、「氏」を意味する中国語の氏 (shì) は祖形の第一音節を欠いた形であり、姓 (xìng)「姓・氏」はその姉妹語であることを指摘しておきたい。

「氏」との関連でふれなければならないのは、「人 (pitō)」という語である。

人ならば母が愛子をあさもよし紀の川の辺の妹と背の山 (『万葉集』 1209)

「人」という語の起源について古来さまざまな解釈が試みられてきたが、定説や通説と言えるようなものは存在しない。「霊 (ヒ) ノ止 (ト) マル所ノ意カラト云ふ」(『大言海』) とか、「ヒは日、霊。トは所、物の意か」(『広辞苑』) といった説があるけれども、これだけではそれが真であるとも偽であるとも言いがたい。一方、「ヒト (人) はヒト (一) と同一」とする白鳥庫吉の説があつて、山中襄太 (1976) はこれに賛成しているが、別の稿で論じるように、「一 (pitō)」の起源は「人」とは異なるところに求めるべきである。

「人」という語の成り立ちについて私見を述べれば、それは「氏」の姉妹語である。すなわち、閉じられた血縁集団をつくって狩猟・採集生活を送っていた大昔の人々は自分たちを「同胞 (はらから)」、すなわち「同じ子宮・腹に包まれていたもの」と認識し、それを表すのに「子宮・腹」を表す語をあてた。そして後に、これがほかの集団の呼称ともなり、「物」や「動物」に対する「人間」という意味に変わったのではあるまいか。

「子宮・腹」を表す語が「人」を表すようになった例は多くの言語に見られそうである。アイヌ語の utar「人々」はインド・ヨーロッパ祖語の \*udero-「腹・子宮」や日本語の「空・虚・洞 (uturo)」と同源であり、かつては「一族・同族」を意味する語であつたと思われる。

アイヌ語の pito「神と同等の人間」にも注目しなければならない。これはアイヌ語の叙事詩に使われている雅語であり、古い日本語からの借用語だと言われている。しかし、日本語で「人」を [pito] あるいは [pitō) のように発音していたのは有史前のことであると推定される。したがって、pito はアイヌ語と日本語が今のように異なる言語に分化する前の時代

の古い形態をとどめている語であると理解しなければならない。

「人」を表す \*pata 系列の語として最後に注目するのは、祖形の第一音節を失った形態である。「垂乳根」の「垂」がもともと「子宮・腹」を意味するものであったことは先に述べたとおりであるが、これと同類の形態が「人」を表すようになった。景行天皇や神功皇后の名前に付いた「大足彦 (oφotarasiφiko)」とか「息長帯比売 (ökinagatarasiφime)」における「足・帯 (tarasi)」の tara- は「垂乳根」の「垂」と同源で、「人」という意味を表したと考えられる。そして、-si は中国語の士 (ši) や氏 (ši), あるいは日本語の「人 (φitö)」の -tö と同源で、これも「人」という意味であったと見なされる。

「垂乳根」の「垂」と同源で「人」を表すもっと明白な例がある。日本語で「一人 (φitori)」とか「幾人 (ikutari)」などと言うときの「人 (tari)」, タミル語の tallai 「母」, アイヌ語の tures 「妹」の ture- などである。日本語の不定人称「誰 (tare)」も、これらの語の仲間であろう。さらに、英語の mother 「母」(IE. \*māter-) や, father 「父」(IE. pater-) や, brother (IE. bhrāter-) などを構成する -ther (IE. \*-ter) もこれらと同源であると見なされる。そしてこの -ther は、先に示した古期英語の hreþer 「胸・子宮・心臓」の -þer や beorþor 「出産」の -þor とも同源であることを強調しておきたい。

「垂乳根」の「乳根」と同源と見なされる語の中にも、「人」を表す語と、「子宮・腹」のイメージを呼び起こす語が存在する。そのような語として、中国語からは上述の士 (ši) や氏 (ši) のほかに次の語があげられる。

親 (tc<sup>h</sup>in) 「父母」(漢音・呉音: シン)

孫 (sün) 「孫」(漢音・呉音: ソン)

産 (tɕ<sup>h</sup>än) 「産む」(漢音: サン, 呉音: セン)

娠 (gēn) 「妊娠する」(漢音・呉音: シン)

雌 (ts<sup>h</sup>i) 「雌 (の)」(漢音・呉音: シ)

これらは「乳根」との関係が分かりやすい例であるが、次の語はそれが分かりにくい例である。

児 (áɪ) 「息子・子供」(漢音: ジ, 呉音: ニ)

人 (zǎn) 「人間」(漢音: ジン, 呉音: ニン)

妊 (zǎn) 「妊娠する」(漢音: ジン, 呉音: ニン)

児 (áɪ) は独特な音変化を遂げた語である。すなわち、「児」の漢音「ジ」は [nz] であったが、現代語ではこれが消失したと言われている。要するに、児 (áɪ) はかつての音をまったくとどめていないのである。一方、「人・妊」に関しては漢音「ジン」の「ジ」、つまり [nz] が現代語で [z] になったと推定されている。[z] は [r] に似た音であり、この音からも「人・妊」と「乳根」とのつながりは見えにくい。しかしこれらの語の古音から判断すれば、両者が同じ語から発したものであると理解される。ついでに述べておくと、忍 (zǎn) 「耐える」(漢音: ジン, 呉音: ニン) という語も上記の語と同源であり、その音を究極にま

で溯れば、日本語の「忍ぶ (sinobu)」の「忍 (sino)」と同じ源にたどり着くはずである。

「乳根」と同源の語は、ヨーロッパ語にも見いだされる。英語の sun 「息子」(IE. \*sūnu-/suyu-) はそういう語であり、これはラテン語の sine 「胸・湾曲・空洞」と関係がありそうに思われる。sister 「姉妹」(OE. *sweostor*) の sis- もこれと無関係ではあるまい。そして日本語には、

後<sup>おく</sup>れ居て恋ひつつあらず追<sup>し</sup>い及<sup>くまみち</sup>かむ道の阿<sup>しの</sup>廻<sup>ゆ</sup>に標<sup>せ</sup>結へわが背 (『万葉集』115)

などの歌に現れる「背」, すなわち「姉妹から見た兄弟」や「夫, あるいは女性から見た恋人」を意味した「夫・兄・背 (se)」という語がある。これは、「乳根」の「乳 (ti)」に相当する音節を継承した形態, すなわちたびたび引き合いに出す [t] > [s] という音変化を経たものであると推定される。

さて次に取りあげるのは、日本語の「腹 (para)」や「洞 (pora)」や「虚 (uro)」, そして英語の belly 「腹」や bowl 「鉢」や vale 「谷」など、内部が空洞の物や場所を表す語である。これらと形態的に類似した語の中に、「人」を表す語が見つかるであろうか。

そのような語として最初に思い浮かぶのは、

うつそみの人にあるわれや明日<sup>あす</sup>よりは二上山<sup>ふたかみやま</sup>を弟<sup>いろせ</sup>世とわが見む (『万葉集』165)

に見られる「弟世」, すなわち「同母の姉妹から言う兄または弟」を意味する「同母兄弟 (iröse)」である。そして、この語における「同母 (irö)」という形態は次の語にも見受けられる。

同母兄 (iröye) 「同母の兄」

同母妹 (irömo) 「同母の男兄弟から言う妹」

同母弟 (irödö) 「同母の兄から言う弟」

同母妹 (irödö) 「同母の姉から言う妹」

同母兄 (iröne) 「同母の弟から言う兄」

同母姉 (iröne) 「同母の妹から言う姉」

同母兄弟 (iröse) 「同母の姉妹から言う兄または弟」

「同母 (irö)」は、上述の「腹 (para)」や「洞 (pora)」におけるように祖形の語頭音 [p] が [φ] に弱化した後、「虚 (uro)」におけるように [φ] が消失して生まれた形であろう。そしてその原義は、「生みの母」を意味する「母 (iröφa)」という語から素直に類推すれば、「子宮・腹」あるいは「同腹・同母」であったと見るのが自然である。この解釈は、「天子がこもる仮の屋」のことを「倚廬 (irö)」と称したという事実からも裏付けられる。

「同母 (irö)」と同じことは、天皇・皇族の父と皇族・豪族の娘を母に持つ兄妹の名に使われたという「入彦 (iribiko)」と「入日売 (iribime)」の「入 (iri)」についても言える。また、天皇・皇族の父と皇族に關係のある女性を母に持つ女子を言うことが多いとされる「郎子 (iratuko)」と「郎女 (iratume)」における「郎 (ira)」についても、その原義は「子宮・腹」あるいは「同腹・同母」であったと言わなくてはならない。

これらと同源で「人」を表す語は、日本語以外の言語にも見いだされる。次に示すアイヌ

語における名詞語根 *ir-* は、紛れもなく上述の「同母 (*irö*)」と同源である。

*irutar* 「兄弟姉妹たち」  
*irokkayo* 「男兄弟・従兄弟」  
*irmenoko* 「姉妹・従姉妹」  
*irwak* 「兄弟姉妹」  
*irwakutar* 「兄弟姉妹たち」

ちなみに、*irutar* と *iruwakutar* の *-utar* は上述の *utar* 「人々」が複数接辞化したものである。また、*irokkayo* の *-okkayo* は「男・男性」という意味である。*irwak* の *-wak* や *iruwakutar* の *-wak-* も同種の形態であろう。なお、この *-okkayo* や *-wak* は後で取りあげる日本語の「彦 (*hiko*)」と同源であると推定される。

中国にも、「同母 (*irö*)」と同源の語が存在する。次の語は、そのような語と見てよいだろう。

郎 (*láng*) 「男子」(漢音・呉音：ラウ)  
 侶 (*lǚ*) 「連れ・仲間」(漢音：リョ, 呉音：ロ)

これらの語と「子宮・腹」との関係、つまりこれらの語が「子宮・腹に包まれたもの」という意味を内包する語であったことは、同じ *\*pala/para* 系列の語で、祖形の第一音節を失った籠 (*lóng*) 「かご」、炉 (*lú*) 「いろり」、盧 (*lú*) 「飯びつ」、臚 (*lú*) 「肌・皮」などの語からうかがわれる。

ところで、祖形の第一音節を消失させた上述の語とは反対に、

妣 (*pǐ*) 「母・亡母」(漢音・呉音：ヒ)  
 父 (*fù*) 「父親」(漢音：フ, 呉音：ホ)  
 夫 (*fū*) 「夫・人・男」(漢音・呉音：フ)  
 婦 (*fù*) 「女性」(漢音：フウ, 呉音：ブ)  
 妃 (*fēi*) 「妃」(漢音：ハイ, 呉音：ヒ)

などは祖形の第二音節が脱落している。しかし、これらが *\*pala/para* 系列の語であるとは断じられない。英語の *father* の *fa-* やラテン語の *pater* 「父」の *pa-* と同様に、また中国語の皮 (*pí*) 「皮」や脾 (*pí*) 「脾臓」、肺 (*fèi*) 「肺」や胚 (*pēi*) 「胚」と同様に、他の系列に属するものである可能性が同じくらいに認められるからである。

ヨーロッパ語にも、「同母 (*irö*)」と同源の「人」を表す語、すなわち「子宮・腹」を表す語から派生したと思われる *\*pala/para* 系列の語がいろいろと存在する。そのような語として、あるいはそのような形態を含む語として、たとえばラテン語の次の語があげられる。

*vir* 「男」、*virgō* 「処女」  
*puer* 「少年」、*puella* 「少女」  
*filius* 「息子」、*filia* 「娘」  
*parens* 「親」、*parere* 「子をもうける」

frāter 「兄弟」

plēbēs/plebs 「人々・国民」, populus 「民衆・人民」

これらの語のうち vir 「男」は、形態と意味の両面において古期英語の wer 「人・男・夫」と類似しているところが注目される。いずれも [w] という語頭音を有している。この [w] は [p] が弱化したものであり、この音、あるいはこの音を含む音節を失ってしまったのが日本語の「同母 (irō)」や「郎 (ira)」であり、中国語の郎 (láng) や侶 (lǚ) であると見てよい。

次に, puer 「少年」と puella 「少女」, filius 「息子」と filia 「娘」に注目しよう。これらは言うまでもなく、一つの語であったものが分化した語である。これらの語と同じ語根を有する古期英語の bearn 「子供」は、そのような分化が起こらなかった例と見てよい。一方、ゴート語では barn 「子供」, baúr 「息子・子供」という分化が起こっている。なお、これらの語と同じ語根を含んでいると見なされる英語の bear 「産む・運ぶ・耐える」(IE. \*bher- 「産む・運ぶ」) は、それらの語の原義が「子宮・腹に包まれていたもの」あるいは「子宮・腹から出てきたもの」であったことを裏付ける傍証の一つとなりえる。同様に、古期英語の bearm 「胸・膝・中央・内部」とゴート語の bearms 「胸・膝」もそのような例として役立つ。

parens 「親」についても若干の注釈を加えておく必要がある。この語は、定説に従えば, parere 「子をもうける」の派生語であり、この動詞はインド・ヨーロッパ祖語の \*perə- 「生む・産む」に溯る。この説に筆者も異論はない。しかしこの説は、インド・ヨーロッパ祖語のその動詞が「子宮・腹」を意味する名詞から派生したものであるという認識を欠いていた。\*perə- と日本語の「腹 (para)」は偶然にその発音が似ているのではない。

「子宮・腹」という意味とのかかわりは、英語の brother 「兄弟」と同源の frāter 「兄弟」という語において一段と明確である。というのも、この語における frā- が日本語の「腹 (para)」や「洞 (pora)」と、-ter が日本語の「樽 (taru)」や「垂 (taru)」と形態的に似ているからである。frāter の原義は「同腹・同母の人」であったと見るのが妥当な解釈である。

ところで、「同腹・同母の人」という意味はかつての母系制社会の中で「同族の人」あるいは「同族の人々」という意味を派生させた。英語の brother 「兄弟」やラテン語の frāter 「兄弟」と同源であるギリシア語の phrātēr 「同族の人」はそのような意味変化を経た語であろう。また、「同族の人々」という意味はかつての部族社会の中で「民衆・人民・国民」といった意味を派生させた。ラテン語の plēbēs/plebs 「人々・国民」や populus 「民衆・人民」、英語の folk 「人民・民衆」や people 「人々・国民」などのそのような意味変化を経たものであると考えられる。なお folk に関しては、それがインド・ヨーロッパ祖語の \*pelə- 「満たす」に溯るという説や、\*pel- 「囲い」という語を想定したうえで、その原義を「囲われた土地に属する人々」とする説があるけれども、これらの考えには同調できない。

\*pala/para 系列の形態を含む最後の例として英語の bride 「花嫁」という語をあげ、その成り立ちについて述べておきたい。この語は古期英語の brȳd に溯る。そして、brȳd はゴート語の brūps や古期ノルド語の brúðr と同源であり、ゲルマン祖語の \*brūðiz に溯るが、それ

以前の形態は不明とされている。しかし一方で、英語の brood 「子孫・子供たち」や breed 「(子)を産む・飼育する」などとともに、インド・ヨーロッパ祖語の \*bhreu- 「沸かす・煮る」に溯るとする説もある。これは筆者の考えるところとは大きく異なっている。

筆者の想定では、bride 「花嫁」は brood 「子孫・子供たち」などとともに birth 「誕生・出産 (OE. *byrd*) の姉妹語であり、その祖形は「花嫁」を意味する上述の古期ノルド語 *brúðr*, あるいは「兄弟」を意味する古期英語 *brōþor* に似通っていた。すなわち、その第一音節は日本語の「腹 (para)」や「洞 (pora)」と同じ系列の形態であり、第二音節は「垂乳根」の「垂 (tara)」や「樽 (taru)」と同じ系列の形態であったと推定される。そして、bride 「花嫁」の原義は「子袋のある人」であったと考えられる。

しかし、すぐに付け加えておくが、bride における「花嫁」という意味は「女」という意味の派生概念であり、「女」という意味は「子袋のある人」という意味の派生概念であった。言わんとする意味は要するに、bride の原義は「子袋のある人」であり、これが「女」という意味に転じ、「女」がさらに「花嫁」という意味に転じたということである。このことは、古期英語の *brȳd* に「花嫁」という意味とは別に、「妻」や「女」という意味が存在したことからもうかがい知ることができる。

さて次に注目するのは、英語の womb 「子宮」という語に連なるさまざまな言葉である。

まず最初に、womb という語の成り立ちについて述べる。womb はゴート語の *wamba* などにもとづいてゲルマン祖語の \**wambo* に溯ると想定されている。そして、それに先行する形態は不明ということになっているが、筆者はそれが英語の embryo 「胎児」に似た形であったと考えている。この embryo はラテン語の *embryō* に由来する語であり、ギリシア語の *émbrýon* とも同源である。そして同源と言えば、womb は古期英語の *umbor* 「幼児」とも同源であると考えられる。

こうして、womb の wom- は英語の in 「～の中に」の祖形とされるインド・ヨーロッパ祖語の \**en* や anus 「肛門」の祖形とされる \**āno*- 「輪」と同源であり、これは中国語の 圓 (*yuán*) 「円」や日本語の「穴 (ana)」という語にも連なる形態であると推定される。一方、womb の -b は英語の bear 「産む」や bore 「穴をあける」の祖形とされるインド・ヨーロッパ祖語の \**bher*- 「産む」、およびこれと同源と見なしうる \**aulo*- 「洞穴」に溯る形であり、これは日本語の「腹 (para)」や「洞 (pora)」や「虚 (uro)」にも連なる形態であると推定される。

このように womb の原義は「内部が空洞のもの」であったと見なされるが、ここで大事なことは womb の wom- と同源であると判断される語、あるいはそのような形態を含む語の中に「人」を表す語がいくつも見いだされるということである。そのような明確な例の一つとして、ラテン語の *fēmina* 「女」をあげることができる。

*fēmina* は、従来の説明では、インド・ヨーロッパ祖語の \**dhēi*- 「吸う」に溯り、その原義は「乳を吸わせる人」であったとされている。しかし、\**dhēi*- と *fēmina* は、それらを自然な音変化で結びつけるには形態がかけ離れていよう。*fēmina* の *fēmi*- は womb の wom- と同

源であり、*fēmina* の原義は「子袋のある人」であつたと見るのが自然である。なお、*fēmina* の -na の由来ははっきりしない。*\*pana* 系列に属する日本語の「穴(ana)」や英語の *antrum* 「空洞」(Gk. *antron*) などの an- と同源で、祖形の第一音節が脱落した形ではないかと思われるが、これを証明する手立てはなさそうである。

wom- と同源の形態と見なしうる別の語に、ラテン語の *homō* 「人」がある。ただし、従来の説はこの語に関してもその起源をインド・ヨーロッパ祖語の *\*dhghem-* 「大地」という見当違いのところに求めている。これらの語は、音声面でも意味面でも関連性が薄いように思われる。

wom- と同源と思われる形態は親族名詞にも認められる。たとえばラテン語の *amita* 「おば」の *ami-* や、ギリシア語の *ammá(s)* 「乳母」の *ammá-* はその種の形態であると判断してよい。また、「母」を意味する英語の *mother* の *mo-* やラテン語の *māter* の *mā-* などは、祖形の第一音節が脱落した形であると推定される。そして、*mother* や *māter* の原義は「子袋のある人」であつたと考えられる。これは、「母親」のことを日本語で「御袋(おふくろ)」と言うのと同じ発想による命名である。

次に、wom- と同源とおぼしき語が日本語にもいくつか存在することを指摘しておきたい。まずは、そのような例を示してみよう。

母 (*ömö*) 「母・乳母」

臣 (*ömi*) 「臣下・姓(かばね)の一つ」

嫗 (*ömina*) 「成人の女・年のいった女・老女」

姫 (*φime*) 「立派な女子・貴人の娘」

妹 (*imo*) 「(兄弟から見た) 姉妹・(結婚相手としての) 女・妻」

嫁・姫 (*yome*) 「息子の妻」

牝・雌・女・妻 (*me*) 「(複合語の成分として) 雌・女・妻」

姪 (*meφi*) 「兄弟姉妹の娘」

これらの語を見て直感されることは、上述したヨーロッパ語の親族名詞と似ていることである。「母 (*ömö*)」が朝鮮語の *ömi* 「母」と似ていることはよく知られているが、これはたとえばギリシア語の *ammá(s)* 「乳母」などとも似ている。また、「牝・雌・女・妻 (*me*)」は英語の *mother* 「母」の *mo-* やラテン語の *māter* 「母」の *ma-* と似ている。「嫗 (*ömina*)」はラテン語の *fēmina* 「女」とそっくりではないか。

日本語の「母 (*ömö*)」や「嫗 (*ömina*)」がヨーロッパ語の wom- などと同源であることを裏付ける証拠の一つとして、「母じ (*ömözi*)」という形容詞をあげることができる。この語は「母 (*ömö*)」に形容詞語尾の「じ (*zi*)」が付加されたものであり、「同じ母親から生まれたものではないが、まるで同母兄弟のように親しい」(『岩波古語辞典』) という意味を表した。これは、「母 (*ömö*)」に「子宮・腹」という含意があつてこそ生まれた意味であろう。

日本語の「母 (*ömö*)」などの語が英語の wom- などと同源であること、つまり「子宮・腹」

という意味を内包する言葉であったことは、次のような語からも裏付けを得ることができる。

産む (umu), 生まる (umaru), 生まふ (umaφu), 殖る (umaφaru)

埋む (umu), 埋もる (umoru)

秘む (φimu)

思ふ (ömöφu/möφu)

重し (ömösi)

これらの語が日本語の「母 (ömö)」や英語の wom- などと形態的に似ていることを確認したうえで、意味的にもそれらが「子宮・腹」のイメージと重なるものであることに注目しなければならない。「産む」と「生まる」、そして「子を幾人も産む」を意味する「生まふ」と「生まれたものが増え広がる」を意味する「殖る」がそのような語であることは言うまでもないが、「埋む」と「埋もる」、そして「思ふ」と「重し」という語に関しても、「子宮・腹」を表す語との間に意味的な重なりが認められる。「覆う」、「覆うもの」という意味において、あるいは「覆われた内部の充実感」という点においてである。「埋む」と「埋もる」は「穴や窪みに土などを一杯に入れる」ということ、あるいはそのような状態になることを意味し、「秘む」は「大事に、奥深くしまう」ことを意味する。また、「思ふ」は「胸のうちに、心配・恨み・恋・予想などを抱いて、おもてに出さず、じっとたくわえている意が原義」(『岩波古語辞典』)であり、意思・推量などを表す助動詞「む (mu)」や否定・不可能を表す助動詞「ましじ (masizi)」などはこの語と同根であろう。そして、「重し」は「空っぽ」とは正反対の感覚、いわば身重の人が腹におぼえる満腹感に似た状態・性質を表している。このような形態と意味の両面における類似性は、とりも直さず、これらの語がすべて同源だということを裏付けているのである。なお『岩波古語辞典』は、「思ふ」という語についてそれが「顔面」を意味する「面 (ömö)」に「覆ふ (öφöφu)」という動詞が合わさってできた語である可能性を示唆しているが、このように考えるのはどうかと思われる。「面 (ömö)」と「思ふ (ömöφu)」の関係は、先に論じた覆いと覆われたものの関係としてとらえられるべきであろう。つまり、両者の関係は表面としての「頬・面 (tura)」と内部に包まれた「垂 (taru)」の関係と同質のものであると考えられる。

womb の wom- と同じ系列に属する語の最後の例として、日本語の「母 (ömö)」と「妹 (imo)」に対応する中国語の

母 (mǔ)「母親」(漢音：ボウ, 呉音：モ／ム)

妹 (mèi)「妹」(漢音：バイ, 呉音：マイ)

という親族名詞にもふれておきたい。言うまでもなく、これらは祖形の第一音節を欠いた形である。そしてこれらの語の原義は、日本語の「母 (ömö)」や英語の mother「母」などと同様に、「子袋のある人」であったと考えられる。このような意味を彷彿させる語に、

埋 (mái)「埋める・埋まる」(呉音：マイ)

弥 (mí)「満ちる・満たす・覆い隠す」(漢音：ビ, 呉音：ミ)

蒙 (mǎng) 「覆い隠す」 (漢音: ボウ, 呉音: モウ)

などがある。これらの語のうち、特に埋 (mái) は注目に値する。埋 (mái) と母 (mǔ), 妹 (mèi) との間に、日本語の「埋む (umu)」, 「埋もる (umoru)」と「母 (ömö)」, 「妹 (imo)」との間におけるのと同じ関係が成立するからである。ちなみに、この種の関係は \*pala/para 系列の形態を含む古期英語の byrgan 「埋める・埋葬する」や beorgan 「保存する・守る」と beorn 「勇者・貴人・王・王子」との間にも見られる関係である。

さて、次に取りあげるのは \*pana 系列の語である。この系列の日本語には、先にあげた「穴 (ana)」のほかに、次のような親族名詞が含まれる。

兄 (ani) 「(弟に対して) 兄」

姉 (ane) 「(古くは弟に対して、後に妹に対して) 姉」

兄・姉 (ye) 「(弟から見た) 兄・(妹から見た) 姉・年上の者」

これらの語が「子宮・腹」という意味を内包する語であったこと、また「兄・姉 (ye)」が祖形の第一音節を引き継いだ語であったことは、次に示す語から明らかである。

胞衣 (ena) 「胎児を包んでいる膜」

胞 (ye) (胎児を包んでいる膜)

中国語にも、\*pana 系列の「人」を表す語が存在する。次の語は、祖形の第一音節を失ったそのような語と見なしてよいだろう。

女 (nǚ) 「女」 (漢音: ゼヨ, 呉音: ニョ)

奴 (nú) 「奴隸」 (漢音: ド, 呉音: ヌ)

尼 (ní) 「女僧」 (漢音: ゼ, 呉音: ニ)

娘 (niáng) 「母」 (漢音: ゼャウ, 呉音: ニャウ)

嬢 (niáng) 「娘」 (漢音: ゼャウ, 呉音: ニャウ)

男 (nán) 「男」 (漢音: ダン, 呉音: ナン)

ここで、上に示した漢音と呉音が大きく異なっていることについて一言しておきたい。現代語の発音は明らかに呉音とつながっていて、漢音とは不連続である。つまり、漢音の「ゼヨ, ド, ゼ, ゼャウ, ダン」は \*pana 系列の祖形を受け継いだ音ではあるまい。これらは、おそらく \*pata 系列の祖形を受け継いだ日本語の「氏 (udi)」や「弟・乙 (ötö)」, 中国語の氏 (si) や弟 (ti) と同じ系列の音である。

ところで、次の語は上に示した日本語の「胞衣 (ena)」, 「胞 (ye)」と同源の \*pana 系列の形態であると考えられる。

孕 (yùn) 「妊娠する」 (漢音・呉音: ユウ)

また、この語は英語の次の形態ともかかわっているように思われる。

andr(o)- 「人間・男 (性)・雄器・雄蕊」 (Gk. *andro-* 「男 (性)」)

この形態は antrum 「空洞」 (Gk. *antron*) の姉妹語で、an- は日本語の「穴」や「鼻」と、-dr(o) は「垂乳根」の「垂」や「樽」などと同源であるにちがいない。したがって、andr(o)-

が「子宮・腹」という概念に根ざした形態であることは確実である。

ここまで、\*pata 系列、\*pala/para 系列、\*pama 系列、\*pana 系列に属する語について考察を進めてきた。残されているのはあと一つ、\*paka 系列の語である。この系列の語に関しても、その出自がすぐにそれと分かる語もあれば、祖形とはかけ離れた形になってしまった語も存在する。すでに述べたように、日本語の「箱 (fako)」や「履く (faku)」は明確な \*paka 系列の例である。「含む (fukumu)」や「袋 (fukuro)」も、同じ祖形を継承した形態に -mu, -ro が付加されたものであることは明白である。英語でも、pack「包む・包み」、poke「小袋」、bag「袋・カバン」が同源の語であることは容易に理解される。同様に、中国語の腹 (fù)「腹」や服 (fú)「服」は日本語での漢音「フク」によって \*paka 系列の語であると知られる。

しかし当然のことながら、\*paka 系列の語であると仮定することしかできない語も多く存在する。たとえば中国語の袴 (kù)「ズボン」は日本語の「履く (faku)」の -ku や「袴 (fakama)」の -ka- に対応し、櫃 (kuì) は「箱 (fako)」の -ko に対応する形態であると見なされる。同様に、日本語の「剥る (kuru)」は「抉る (weguru)」の、「組む (kumu)」や「籠・込む (komu)」は「含む (fukumu)」の、また「蔵・倉 (kura)」や「殻・軀 (kara)」は「袋 (fukuro)」の姉妹語として、祖形の第一音節が脱落した形であると想定することができる。「包む (kurumu)」や「衣 (kөрөмө)」も同じである。「窪 (kubo)」は祖形の第一音節の弱化・消失に伴い、語末に -bo が付加されたものであり、英語の cave「洞穴」(L. *cava*) と形成過程が同じであると仮定される。なお付け加えておくと、中国語の衣 (yī)「衣服」は服 (fú)「服」と同源で \*paka 系列の語ではないかと思われるが、そうであると断言することはできない。

おさらいはこれだけにしておこう。ここでの問題は、上に示した語と同源の、「人」を表す語が存在するかどうかである。そのような語として最初に思い浮かぶのは、「孫 (まご)」を意味する「孫 (fiko)」と、

年にありて一夜妹に逢ふ彦星もわれにまさりて思ふらめや (『万葉集』3657)  
に見える「彦星」<sup>ひこほし</sup>、すなわち「彦星 (fikoφōsi)」などにおける「彦 (fiko)」である。

「彦」を「箱」などと同源の語と見るのは、むしろ筆者の見解である。従来の考えを代表するものとして、『岩波古語辞典』の説明を引いておこう。

「姫 (ひめ) の対。ヒは日・太陽。ムスヒ (産霊)・ヒモロキ (神籬) のヒと同じ。コは男子の意。尊称として男神の名に冠せられ、また男の名前の下につけて使われた。後に一般的に男の尊称。

先に述べたように、「姫 (fime)」は「母 (ömö)」や「妹 (imo)」と、また「産む (umu)」や「秘む (fimu)」と同じ系列の語であると筆者は見なしている。こう考えるほうが全体を統一的に説明できるからである。「彦 (fiko)」に関しても、これを「孫 (fiko)」と同源の語と見るのが自然であろう。私見では、「小児・子供・赤ん坊」を意味する「ぼこ (boko)」もこれと同源である。また、

緑子<sup>みどりこ</sup>の 若子<sup>わくご</sup>が身には たらちし 母<sup>むだ</sup>に懐かえ…… (『万葉集』3791)

における「若子<sup>わくご</sup>」, すなわち「幼児・若者」を意味する「若子 (wakugo)」の waku- や「若し (wakasi)」の waka- もそれらと同源であると思われる。さらに, 「牡・雄・男・夫 (wo)」は「彦」の  $\phi$ - に対応し, 「子 (ko)」は「彦」の -ko に対応する形態であると推定される。

\*paka 系列の「人」を表す語は日本語以外にも見られる。たとえば, アイヌ語の ak 「弟」や hoku 「夫」や ekasi 「おじいさん」の eka- はそういう例であろう。また, 次の中国語もそういう例であると見なされる。

伯 (pó) 「伯父・長兄」(漢音: ハク, 呉音: ハ)

これが \*paka 系列の語であることは, 「伯」の漢音が「ハク」であることから知られる。一方, 次の語は同じ祖形の第一音節を脱落させた語であると見なされる。

兄 (ciōŋ) 「兄」(漢音: ケイ, 呉音: キョウ)

漢 (xàn) 「男・男子」(漢音・呉音: カン)

彦 (yàn) 「立派な男子」(漢音・呉音: ゲン)

これらの語が祖形と似ても似つかぬ形になってしまったのは, 一つには祖形の第一音節が失われたからである。また一つには, 第二音節の [k] あるいは [g] という音が [c] や [h] や [y] に変わったからである。ところで, これらの語が「子宮・腹に包まれたもの」という意味を内包した語として始まったものであろうことは, これと同源と見なしうる次の語からもうかがえる。

胸 (ciōŋ) 「胸」(漢音: キョウ, 呉音: ク)

函 (xán) 「箱」(漢音: カン, 呉音: ゴン)

含 (xán) 「含む」(漢音: カン, 呉音: ゴン)

胸 (ciōŋ) は, 内部が空洞であることをイメージさせる身体部位を表している。また, 函 (hán) はまさしく内部が空洞の物を表している。そして含 (hán) は, 空洞の内部に物を包みこむことを表す語である。この意味において, これらの語は「子宮・腹」を表す語と重なりあう。

中国語の漢 (hàn) 「男・男子」や彦 (yàn) 「立派な男子」をあげたついでに, これらと同源ではないかと思われる語がヨーロッパ語に存在したことを指摘しておきたい。古期英語の guma 「人・男・英雄」やゴート語の guma 「人・男」である。語源辞典はこれらの語がインド・ヨーロッパ祖語の \*dhghem 「大地」に溯る可能性を示唆しているが, これは筆者にとって受け入れがたい説である。guma の起源は, 日本語で「身籠る」と言うときの -gomo- や英語で conceive 「妊娠する」と言うときの con- との関係において求められるべきであろう。ついでながら言っておけば, 英語の queen 「女王・王妃」やゴート語の qinō 「女」, そしてそれらの祖形として想定されているインド・ヨーロッパ祖語の \*g<sup>w</sup>en- 「女」も, 究極の起源は guma と同じであるかもしれない。

さて \*paka 系列に属する語として最後に取りあげるのは, 「袋 (fukuro)」の  $\phi$ u- や「抉る (weguru)」の we- に相当する部分が失われた形態, すなわち「蔵・倉 (kura)」や「剥る (kuru)」,

あるいは「包む」(kurumu)の kuru- や「体 (karada)」の kara-, また「食らふ (kuraφu)」の kura- に対応する「人」を表す語である。日本語の「族・柄 (kara)」, およびこれと同源であると言われる満州語の kala 「一族・同族」やモンゴル語の xala 「一族・同族」はそのような語であると見なされる。そして、これらの語の起源を解き明かす鍵が、

たぐつの 拷綱の <sup>しらき</sup>新羅の国ゆ <sup>ひとごと</sup>人言を よしと <sup>き</sup>聞かして <sup>と</sup>問ひ放くる <sup>うから</sup>親族兄弟 <sup>うから</sup>無き国に  
渡り来まして…… (『万葉集』460)

に見える「親族兄弟」に隠されている。

まず最初に、この語の「親族」に注目してみよう。『日本書紀』でこれに相当する語が「宇我邏」と仮名書きされているので、上の万葉歌でも「親族」は「親族」と読むべきかもしれない。実際、そのように読ませている版本もある。しかしいずれにせよ、問題は「親族 (ukara/ugara) の語頭音 u- が何かということである。

従来の語源説では、「親族 (ukara/ugara) はウミカラ (生族) の略であるとか、ウムカラ (生属) の意味であるとか、あるいはウカラ (生幹), ウジカラ (氏族) のことであるとか言われてきた。しかし私見では、この語における u- は \*paka 系列の祖形における第一音節の残滓である。したがって、それは「袋 (φukuro)」や「豊・脹 (φukura)」という語の φu-, あるいは「抉る (weguru)」の we- に相当する形態である。そして、「親族 (ukara/ugara)」の原義は「子宮・腹」であり、これから「同腹の人々」、すなわち「一族・同族」という意味が派生したのである。なお、古代日本語において「親族 (ukara/ugara)」と同じ意味を表した「族 (yakara)」という語の ya- は「家 (ya-)」であると言われているが、これも \*paka 系列の祖形を引き継いだものである可能性が高いように思われる。

次に「親族兄弟」の「兄弟」について言うと、これは言うまでもなく「同胞 (φarakara)」のことである。この語について、『岩波古語辞典』は「ハラは腹、カは族。もと、同母から生れた血縁の者。後に父系的社会になったからか、同父異母の場合にもいう」と説いている。ここで問題となるのは「族・柄 (kara)」の由来である。筆者の見解では、これは「親族 (ukara/ugara) の u- が脱落したものである。したがって、「同胞 (φarakara)」というのは「子宮・腹」を意味する二つの語を重ねたものであり、そこから「同じ母から生まれた者」、すなわち「兄弟姉妹」という意味が派生したのである。

このように「族・柄 (kara)」が「食らふ (kuraφu)」などと同根で、その原義が「子宮・腹」であったという考え、そしてこの意味から「人」を表す語が派生したという考えは、インドのドラヴィダ語族に属するいくつかの言語の中に確たる証拠を見つけることができる。それらの言語では、「族・柄 (kara)」に酷似した形態が「子宮」や「胎児」という意味を表す。

タミル語: karuppai 「子宮」, karu 「母胎・胎児・鋳型」

テルグ語: kari 「動物の子宮」, karuvu 「胎児」

マラヤーラム語: karu 「胚」, karuntala 「世代」

ところで、これらと同源の形態はヨーロッパ語にも見いだされる。日本語の「心 (kokoro)」

と比較されるべきラテン語の cor/cordis 「心臓・胸・心」(IE. \**kerd-*)、およびこれと同源の形態を含む英語の heart 「心臓・胸・心」や、日本語の「体 (karada)」と比較されるべきラテン語の corpus 「体」(IE. \**k<sup>w</sup>rep-*)、およびこれを借用した英語の corpse 「死骸」はそういう例である。英語の colp(o)- 「膺」(IE. \**g<sup>w</sup>elbh-* 「子宮」) や cole(o)- 「鞘 (さや)・覆い」(IE. \**kel-* 「覆う」) など同種の例である。そして、これらと同源と見なされる「人」を表す語として、古期ノルド語の karl 「男」と、これを借用した英語 (スコットランド方言) の carl 「男・野人」があげられる。西ゲルマン祖語の \*kerlaz 「男」に溯るとされる英語の churl 「野卑な男・がさつな男」や、ゲルマン祖語の \*kilpam 「子供・幼児」に溯るとされる英語の child 「子供・幼児」、また語源不詳とされている girl 「少女」や groom 「(古) 召使・下男」、また誤って古期英語の guma 「男・英雄」と同源であると見なされている bridegroom 「花婿」の -groom もそれと同類であろう。なお child は、ゴート語の kilpam 「子宮」と同源であることが従来の語源辞典においても指摘されている。

\*paka 系列の形態で、祖形の第一音節をとどめている語が存在することも指摘しておきたい。ゲルマン諸語に見られる次の語である。

英語: wight 「(古) 生き物・人間」

ドイツ語: Wicht 「生き物・人間・者・物」

オランダ語: wich 「小児・幼児」

古期ノルド語: vætr/vétr 「生き物」

これらの語における wigh- や Wich- の部分は、日本語の「彦」などに相当する形態である。しかし wigh- は、古期ノルド語の væ-/vé- におけるのと同様に、祖形の第二音節を失っている。-gh- は、それが存在したことを示す綴り字上の残滓である。一方、wight と Wicht における -t は、古期ノルド語の -tr という語尾から知られるように、「垂乳根」の「垂」に相当する形態の残滓である。

本節の最後に、二つのことにふれておきたい。一つは、アイヌ語に po 「息子」、kur 「影・姿・人」、kor 「産む・持つ」、kor?m?m 「女陰」などの語があるということ、そしてこの po が上述の「彦」や「ぼこ」の仲間であり、kur や kor や kor?m?m が「族・柄」や「体」などの仲間であるにちがいないということである。もう一つは、

あぢの住む<sup>す</sup>渚沙の入江の<sup>ありそまつあ</sup>荒磯松吾を待つ児らはただ一人のみ (『万葉集』2751)

筑波嶺<sup>つくはね</sup>に雪かも降らる<sup>いな</sup>否をかもかなしき<sup>にの</sup>児ろが布乾さるかも (『万葉集』3351)

に見られる「児ら (kora)」と「児ろ (korô)」である。「児ら」は「上代、人、特に女性を親しんで呼ぶ語」(『岩波古語辞典』) であり、「児ろ」はその上代東国方言であると言われていた。この説明に筆者は何の異論もない。しかし、語末の「ら」と「ろ」が「親愛または軽んずる気持ちを表す接尾辞」であるという考えには疑問をおぼえなくもない。他言語との比較を通して見たとき、「児ら」と「児ろ」がアイヌ語の kur 「影・姿・人」などと同列の語である可能性を否定できないからである。

## 4. 動作主接辞と指小辞

本稿のしめくくりとして述べておきたいのは、「子宮・腹」を表す語から派生した「人」や「子供」を表す語が、ヨーロッパ語においては動作主接辞や指小辞になり、中国語や日本語ではそれらに相当する造語成分になったということについてである。動作主接辞とは「～する人」という意味の動作主名詞をつくるための接辞であり、指小辞とは「小さいもの」を表す接辞のことである。この種の形態が「人」あるいは「子供」を表す語から生まれたというのは非常に素直な考えであると思われるが、このことにふれた文献はほとんど目にしない。

さて、古期英語にはさまざまな動作主接辞と指小辞が存在した。それらを列挙し、それらがどのような語に由来する形態であるかを考えてみよう。

### (1) -end

この接尾辞は古期英語でもっとも生産性の高い動作主接辞であり、lærend「先生」のように、動詞語幹にこの接尾辞が付加されて動作主名詞がつくられた。-end は \*pana 系列の -en- と \*pata 系列の -d が合わさったものであり、-en- は中国語の員 (yuán), -d は中国語の弟 (tì) や徒 (tú) に相当する形態であるとしてよい。

### (2) -ere/-eri

現代英語で -er となったこの接辞は、本来、scip「船」→scipere「船員」のように名詞に付される接辞であったが、やがて writere「書き手」のようにもつばら動詞語幹に付される生産性の高い接尾辞となった。なお、この接尾辞はラテン語の -ārius/-ārium「～する人」の -ar- に対応する形態であり、古期英語の wer「人・男・夫」やラテン語の vir「男」と同源であると見なされる。

### (3) -estre/-istre

現代英語で -ster となったこの接尾辞は、hlēapan「踊る」→hlēapestre「女の踊り子」のように動詞語幹あるいは名詞に付されて動作主名詞をつくった。本来は上述の -ere/-eri (>-er) に対する女性形として用いられたが、後に男性の動作主をも表すようになった。この接尾辞は、その歴史を溯れば、ラテン語の uterus「子宮」と同様にインド・ヨーロッパ祖語の \*udero-「腹・子宮・胃」にたどりつくはずである。

### (4) -ing

古期英語の -ing は「人」を表す接尾辞として、æpele「高貴な」→æpeling「貴人・王子」のように形容詞語幹に付されたり、cynn「部族」→cyning「王」や Cent「ケント」→Centingas「ケントの人々」のように名詞に付されたりした。-ing の -in- は上述の -end の -en- と同類で、中国語の員 (yuán) に通じる形であろう。そして -g は、古期英語の -ing に相当する古期ノルド語の形態が -ingr/-ungr であったことから判断して、日本語の「族・柄 (kara)」やアイヌ語の kur「影・姿・人」と同種の形態の残滓ではないかと思われる。

## (5) -el/-ela/-ol/-ul

この接尾辞は古期英語の wer 「人・男・夫」やラテン語の vir 「男」と同源の \*pala/para 系列の形態であり、æftergang 「継承」→ æftergengal 「継承者」や bēodan 「布告する」→ bydel 「布告者」のように動作主名詞をつくる一方で、gyrdan 「締める」→ gyrdel 「帯・ベルト」のように道具名詞などをつくった。

## (6) -incel

この接尾辞は、hūs 「家」→ hūsincel 「小さな家」のように、中性名詞に付いて「小さいもの」を表した。-incel の in- は上述の -ing の in- と、-cel は child 「子供・幼児」の chil- と同源である。

## (7) -ling

この接尾辞は上記の -el/-ela/-ol/-ul と -ing とが合わさった形であり、geong 「若い」→ geongling 「若者」や fōstor 「養育」→ fōstorling 「養い子・里子」のように形容詞や名詞に付いて「人」を表した。ちなみに、-ling に対応する古期ノルド語の形態は -lingr であり、これが gás 「ガチョウ」→ gæslingr 「ガチョウの雛」のように指小辞として用いられた。

古期英語の動作主接辞と指小辞は以上のとおりである。これらが「人」を表す名詞、あるいは「子供」を表す名詞に由来する形態であるという考えは牽強付会ではない。このことは、中国語の事例と比較してみれば疑う余地のない事実として理解される。中国語では、動作主名詞の大部分が人 (rén), 士 (shì), 司 (sī), 師 (shī), 者 (zhě), 主 (zhǔ) のような「人」を表す名詞を造語成分としてつくられる。また中国語では、子 (zǐ) 「息子・子」と同源の子 (zǐ) が軽蔑の意味を込めて胖子 (pánzi) 「でぶ」とか秃子 (tūzi) 「はげ」などと言うときに使われたり、本来は「息子・子」という意味の兒 (ér) が「小さいもの」あるいは「かわいいもの」を表す指小辞として花 (huā) や小猫 (xiǎomāo) などの語に付加される。なお、子 (zǐ) と同源の仔 (zǐ) は、「幼い」という意味の造語成分として仔猪 (zǐshū) 「子豚」のように用いられる。

事情は日本語でもあまり変わらない。日本語の動作主名詞は、「尋ね人」とか「変わり者」といった少数の表現を除けば、中国語から借用した「人」を表す語からつくられる。中国語の動作主名詞がそのまま日本語の動作主名詞となっている場合も非常に多い。そして、指小辞の用法も中国語と似ている。すなわち、「子 (ko)」と同源の「小 (ko)」がいわば接頭辞として「小人」とか「小歌」のように用いられる一方で、これと同源の形態が特に東北方言において「胎っこ」とか「牛っ子」のように接尾辞として用いられる。このように指小辞が「子供」を意味する語とかかわっていることは確かであるが、古代日本語において「人」を表す名詞や代名詞に付いて謙遜または蔑視の意味を表したとされる「ら (ra)」という形態、たとえば

憶良<sup>おくら</sup>らは今は罷<sup>まか</sup>らむ子<sup>な</sup>泣くらむそのかの母<sup>あ</sup>も吾<sup>あ</sup>を待つらむ (『万葉集』337)

における「憶良<sup>おくら</sup>ら」の「ら」が指小辞と言いうるものかどうか、そしてこれが「子供」を表

す語から派生したものかどうか不明である。今後の課題として残したい。

## 参考文献

- 池上二良編『ウイльта語辞典』北海道大学図書刊行会
- 犬飼隆（2008）『木簡から探る和歌の起源』——「難波津の歌」がうたわれ書かれた時代——』笠間書院
- 大野晋ほか編（1974）『岩波古語辞典』岩波書店
- 近藤健二（2009）「万葉枕詞の系譜」『貿易風』vol. 4 中部大学国際関係学部
- 佐竹昭広ほか校注（1999-2003）『万葉集一、二、三、四』岩波書店
- 佐藤昭（2002）『中国語語音史——中古音から現代音まで——』白帝社
- 田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館
- 寺澤芳雄編（1997）『英語語源辞典』研究社
- 中西進（2008）『万葉集全訳注原文付一、二、三』（中西進著作集 19, 20, 21）四季社
- 中村幸彦ほか編（1982-2003）『角川古語辞典』（全5巻）角川書店
- 日本大辞典刊行会編（1972-1976）『日本国語大辞典』（全20巻）小学館
- 藤堂明保・加納喜光編（2005）『学研新漢和字典』学習研究社
- 堀井令以知（1988）『語源大辞典』東京堂出版
- 前田富祺監修（2005）『日本語源大辞典』小学館
- 山中襄太（1976）『国語語源辞典』校倉書房
- （1985）『続・国語語源辞典』校倉書房
- 吉田金彦（2001）『語源辞典——動物編』東京堂出版
- （2001）『語源辞典——植物編』東京堂出版
- Burrow, T. and M. B. Emeneau (1984) *A Dravidian Etymological Dictionary*, 2nd ed. Oxford University Press. (ドラヴィダ語語源辞典日本語版編集委員会（2006）『ドラヴィダ語語源辞典』きこ書房)
- Klein, Ernest (1971) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*. Amsterdam: Elsevier Scientific Publishing.

(2009年10月29日 受理)